

国際シンポジウムの開催

橋本病発見百周年記念国際シンポジウム

「自己免疫疾患の病因解明と治療法開発への挑戦」

実行委員長 笹月 健彦

1912年、橋本策（はかる）博士は医学部卒業後5年を経ずして新しいタイプの甲状腺疾患（Struma Lymphomatosa）をドイツの臨床外科学雑誌に発表した。その後、1956年にI.Roitt博士、D.Doniach博士らが橋本病は、ヒトで初めての自己免疫疾患であることをLancetに報告し一躍注目されるに至った。現在では臓器特異的あるいは全身性の自己免疫疾患が多数知られており、その大部分は難病として指定されていることは周知のことである。自己免疫疾患の発症のメカニズムは依然として未知のままであり、その解明と、根源的治療法の開発は医学・臨床医学がチャレンジすべき大きな課題として残されている。

このような背景のもとに、橋本病発見百周年を記念して、2012年12月2～4日の3日間、橋本策が学んだ福岡の地で、公益財団法人難病医学研究財団と文部科学省新学術領域研究の支援を頂き、橋本病発見百周年記念国際シンポジウムを開催した。本シンポジウムでは、自己免疫疾患の病因の解明とその理解に立脚した先駆的治療法の開発を目指して、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、カナダ、オーストラリアから11名、日本から16名、計27名の世界の第一線でこの分野をリードしている免疫学者が一堂に会した。シンポジウムは7つのセッションからなり、HLAの高次構造、進化、免疫制御、T細胞による抗原認識とレパトワ選択の制御、免疫応答の分子および細胞レベルでの制御など、未発表のデータを含む最新の知見が発表され、250人を超す若手研究者を中心とした聴衆との間で白熱した討論が繰り広げられた。本邦で数多く開かれている国際シンポジウムの中でも、とりわけ若い研究者達から活発的を射た質問が数多く寄せられ、多くの演者から驚きと賞賛の辞が述べられた。

このシンポジウムにおいては、胸腺におけるT細胞のレパトワ決定にかかわるAIRE、t proteasomeに関してD. Mathis博士、D.Matsumoto博士、そしてK.Tanaka博士から先鋭的な発表がなされ、多くの聴衆を沸かせた。また、S. Sakaguchi博士のTregの自己免疫発現に際しての役割の解明は、永年の謎の解決へ向けた夢を若い研究者に与えるものであった。

さらに、J. McCulsky博士の低分子化合物、アバカビアやカルバマゼピンなどの薬剤が、HLA-B*57:01やHLA-B*15:02分子と直接干渉することによって自己ペプチドレパトワの結合プロファイルを大幅に変えることにより、CTLを誘導し、Stevens Johnson Syndromeを発症させるプロセスの解明は、新時代の薬剤副作用発現機構の究明のみならず、自己免疫応答発現解明に新しい視点を与える貴重な講演であった。

一方、先駆的治療法に関して、T. Kishimoto博士のIL-6受容体に対する抗体を用いた自己免疫疾患、特に関節リウマチの治療法開発に関する発表は大きなインパクトを与えるものであった。その基礎研究から臨床応用までの成功物語は、若い研究者を奮い立たせるものであった。しかもKishimoto博士自身による新しい先駆的療法開発へ向けた基盤研究のさらなる推進は、参加者へ多大の感銘を与えた。

国内外の第一線で激しい競争をくりひろげている研究者達が一堂に会して議論を深めるという貴重

な、そして極めて質の高い会議を、橋本病発見百周年祝典の一つとして開催できたことを感謝し、ご支援頂いた皆様に改めて心からお礼申し上げます。
 (九州大学高等研究院 特別主幹教授)



笹月健彦実行委員長挨拶



高久史磨財団会長挨拶



シンポジウム会場風景

橋本病百周年記念国際シンポジウム
 九州大学生体防御医学研究所30周年記念国際シンポジウム
 第22回九州大学生体防御医学研究所 ホットスプリングハーバー国際シンポジウム
 九州大学ポストグローバルCOE国際シンポジウム

自己免疫疾患の病因解明と治療法開発への挑戦

Autoimmune Diseases Etiology and Therapeutics

Date: Dec. 2nd sun - 4th Tue, 2012
Venue: ACROS Fukuoka, Japan

Admission Free, No Registration Required

Speakers:

Shizuo Akira (Japan)	James McCluskey (Australia)	Kai W. Wucherpfennig (USA)
Stephan Beck (UK)	Yasuo Morishima (Japan)	Kazuhiro Yamamoto (Japan)
Walter Bodmer (UK)	Gerald T. Nepom (USA)	Sho Yamasaki (Japan)
Mark M. Davis (USA)	Yasuharu Nishimura (Japan)	Yasunobu Yoshikai (Japan)
Yoshinori Fukui (Japan)	Colm S. O' Huigin (USA)	
Günter J. Hämmerling (Germany)	Shimon Sakaguchi (Japan)	
Hidetoshi Inoko (Japan)	Takehiko Sasazuki (Japan)	
Hajime Karasuyama (Japan)	Yoko Satta (Japan)	
Tadamitsu Kishimoto (Japan)	Mikako Shirouzu (Japan)	
Hiroshi Kiyono (Japan)	Yousuke Takahama (Japan)	
Philippe Kourilsky (France)	Toshiyuki Takai (Japan)	
Xiaoxia Li (USA)	Keiji Tanaka (Japan)	
Tak W Mak (Canada)	Masaru Taniguchi (Japan)	
Diane J. Mathis (USA)	Katsushi Tokunaga (Japan)	
Mitsuru Matsumoto (Japan)	Yaron Tomer (USA)	

橋本通リ

公益財団法人 難病医学研究財団
 文部科学省新学術領域研究「HLA進化と免疫」推進
 九州大学生体防御医学研究所全国共同利用・共同研究拠点
 九州大学ポストグローバルCOE支援プログラム
 後援 九州大学高等研究院 / 財団法人 福岡観光コンベンションビューロー / 橋本病
 研究財団 / 九州大学医学部
 協賛 橋本病百周年記念国際シンポジウム「自己免疫疾患の病因解明と治療法開発への挑戦」実行委員会
 TEL:092-642-6962 FAX:092-642-6973 E-mail:congre@kijp.kyushu-u.ac.jp

http://www.congre.co.jp/hashimoto100

シンポジウムポスター